

審査の結果の要旨

論文提出者氏名

渡辺昭太

博士課程学位請求論文： 中国語の動詞接尾辞“V 过”の意味と機能に関する研究—日本語との対照も兼ねて—

本博士論文は、中国語の動詞接尾辞の“V 过”に関して、その意味と機能について考察を行ったものである。本論文は全7章からなり、そのうち本論は第1章から第5章までである。

序章では、現代中国語の動詞接尾辞“V 过”の位置付けを述べると共に、他のアスペクト助詞との共通点及び相違点を確認し、先行研究における“V 过”の扱い方や先行研究の問題点などについて論じた。

第1章では、“V 过”の経験用法にする考察を行った。先行研究で経験用法とされている“V 过”の用例を精査すると共に、独自に採取した用例の分析を通じて中国語における経験概念に関して詳しく考察し、中国語における経験とは、現在から比較的遠い過去の出来事であり、かつ、情報価値のある出来事であると指摘した。さらに、“V 过”は人や事物に対する属性付与の機能を持つことに関して、因果関係複文や逆接表現、導入表現といった言語環境で使用され得ることも併せて指摘した。

第2章では、何らかの動作行為を「済ませる」という意味で使用される場合の“V 过”に関して論じた。先行研究の指摘を踏まえた上で、独自に採取した例文の分析を通じ、“V 过”が表す「済ませる」という意味の内実を詳しく考察した。その結果、“V 过”の表す「済ませる」という意味は、「必然的に発生が予測できる予定性のある事態を済ませる」というものであると分析し、これを「予定遂行用法」と名付けた。また、この種の“V 过”は、現在から比較的近い時間帯に起きた出来事に使用されるのが一般的であり、これは出来事の予測可能性という点とも意味的に合致することも指摘した。さらに、完了アスペクト助詞の“V 了”と共に起す際に生じる含意や、複数を表す諸表現との共起性およびその理由に関しても併せて論じた。

第3章では、“V 过”の経験用法と予定遂行用法に関して、出来事の帰属領域という概念を導入しつつ、両者の関連性を考察した。経験用法の“V 过”は、過去から現在までの全期間を対象とした広い時間領域を想定した用法である一方、予定遂行用法の“V 过”は、現在に近い狭い時間領域を想定した用法であることを指摘した。また、想定する時間領域によっては、経験用法と予定遂行用法の中間的表現になる事例もあるとし、経験用法の“V 过”と予定遂行用法“V 过”には連続性があることを確認した。

第4章では、中国語の“V 过”と日本語で経験を表す「V たことがある」という形式との対照研究を行った。その結果、経験となる出来事に情報価値が必要である点に関しては、日本語と中国語で共通する部分があるものの、出来事と現在との時間的隔たりに関しては、日本語は中国語のそれよりも長いことが明らかになった。加えて、「V たことがある」の使用には不特定性という条件が必要であり、特定の出来事は日本語では経験として捉えにくいこ

とを指摘した。その理由として、日本語の経験を表す形式は限量的存在文であることにその要因を求めた。不特定の出来事とはいわば「類」であり、客観的な時間軸上に置かれる事態とは異なる、時間を超越したものであることから、「V たことがある」が属性付与の機能を担うことも併せて指摘した。

第5章では、第4章の考察を踏まえ、経験用法の“V 过”と「V たことがある」が持つ性質が、連体修飾節においても維持されることを確認した。連体修飾節内の出来事が時間詞や文脈から特定のものとして認識できる場合、“V 过”は使用できるが、「V たことがある」は使用しにくくなること、逆に、出来事の特定性が認識されない場合には、「V たことがある」も連体修飾節で使用することができること等を指摘した。

終章では動詞接尾辞“V 过”の位置付けに関して再考を行った。“V 过”は従来、アスペクト助詞と扱われてきたが、単に出来事の時間的局点を叙述する機能を超え、人や事物に属性を付与したり、予定性のある出来事を済ませることによる含意を生じさせたりすることから、アスペクト的な意味を担いつつも、インタラクション性の高い複合的な機能を持つ動詞接尾辞として、純粋なアスペクト助詞からは外すことが妥当であると結論づけた。

このように、本論文はこれまでの研究を踏まえたうえで、従来の研究不足や問題点を指摘し、新しい視点からこれまでに見られないスケールで中国語の“V 过”の意味と機能を考察し、日本語の「V たことがある」との対照を通じて、中国語の“V 过”の特質を浮き彫りにし、日本語との違いを明らかにしたことに大きな価値がある。本論文において論じた“V 过”や日本語の「V たことがある」に関する（いくつかの）指摘や発見は大変示唆的であり、今後の“V 过”に関する研究及び日本語との対照研究に大きな影響を及ぼすものであろう。その意味で、本論文がこの研究分野に占める学術的価値や位置は極めて大きいと言える。ただし、問題がまったくないわけではない。審査委員から経験用法と予定遂行用法をつなぐ“V 过”の中心的な意味に関する論証がやや不十分であること、論証の一部分においてやや強引なところが見られ、用語の定義や記述にもう少しきめ細かさが必要であることなどが改善すべき点として指摘された。しかし、これらの問題点は本論文の学術的価値を損ねるものではない。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。